

氏 名 (本籍)	なが い まさ かつ 永 井 正 勝 (千 葉 県)		
学 位 の 種 類	博 士 (言 語 学)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 5210 号		
学位授与年月日	平成 21 年 12 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	中エジプト語テキストの文献言語学的研究 －「エルミタージュ・パピルス No.1115」の古書体学的分析と文字素論的分析－		
主 査	筑波大学教授	Ph. D. (言語学)	池 田 潤
副 査	筑波大学准教授	博士 (文学)	臼 山 利 信
副 査	筑波大学准教授	文学博士	金 仁 和
副 査	筑波大学教授	Ph. D. (アッシリア学)	山 田 重 郎
副 査	早稲田大学文学学術院教授		近 藤 二 郎

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、神官文字で書写された中エジプト語のパピルス文書「エルミタージュ・パピルス No.1115」をコーパスとする文献言語学的研究である。第Ⅰ部で方法論の提示と分析資料の吟味を行った上で、第Ⅱ部においてコーパス中に現れるすべての文字の古書体学的分析と釈読を行い、これをもとに表記テキストの翻字を作成している。第Ⅲ部では、コーパスを文字素論的に分析することにより表記テキストから言語ユニットを抽出し、その総体としての言語テキストを提示している。各章の要旨は下記の通りである。

序論では、まず、エジプト学に聖刻文字至上主義とも言うべき問題が存在することを指摘した上で、神官文字の生データを古書体学的に読み解くことの重要性を説く。次に、一般に文字とそれによって表記される言語の関係が単純ではないことを示した上で、それらを結びつける文字素論的分析の必要性を主張している。「エルミタージュ・パピルス No.1115」というコーパスを対象として古書体学的分析と文字素論的分析を具体的に実践することにより、中エジプト語の文献言語学的研究のモデルを示すことが本論文の目的である。

第Ⅰ部は2つの章（第1章、第2章）によって構成される。第1章では、エジプト語の概要を述べた後、死滅した言語の文献資料を扱う際の3つの研究段階を提示している。すなわち、文献資料を用いて釈読を行い、表記テキストの翻字を作成する段階（第1段階）、表記テキストから言語ユニットを抽出し、言語テキストを作成する段階（第2段階）、言語テキストを用いて言語構造の分析を行う段階（第3段階）の3つである。第1段階の研究を行う上で重要となるのが資料の等級化である。本論文では、1等資料（原資料）、2等資料（写真）、3等資料（影印）、4等資料（文字のトレース）、5等資料（翻字）、6等資料（子音転写）、7等資料（音訳）という7つの等級を設定している。このうち1等資料（原資料）が本来的な意味における1次資料であるが、筆者は、日常的に原資料にアクセスできない場合、現実には2等資料（写真）や3等資料（影印）を事実上の1次資料とみなして文献言語学的研究を行う必要があるという立場に立つ。第2段階の研究においては、文字表記とそこから抽出することのできる言語形式とを峻別することが重要となる。そこで、筆者は文字を形式的に捉えた場合の単位を「表記ユニット」、そこから抽出することのできる言語形式を「言語ユニット」、表記ユニットと言語ユニットの集合をそれぞれ「表記テキスト」「言語テキスト」と呼

び分ける。なお、言語構造の記述（第3段階）は言語ユニットや言語テキストを対象として行われることになるが、この段階は本論文の範囲外となる。

第2章では、まず「エルミタージュ・パピルス No.1115」をコーパスに選んだ理由を述べ、次にエルミタージュ国立美術館で実施した同パピルスの実見調査の概要を述べている。その上で、同パピルスに関する先行研究や書誌学的な特徴を詳細に論じている。そこには、行のぶら下げやパピルス・シートの張り合わせ方など、従来の研究で論じられることがほとんどなかった指摘も存在する。

第Ⅱ部は6つの章（第3章～第8章）によって構成される。第3章では釈読や翻字に関する基礎概念を整理し、本論文で使用する文字コードを提示している。続く第4章ではコーパス全体の翻字を文字コードで提示している。第5章～第8章は第4章で提示された翻字に関する各論である。翻字の見解の違いが語の認定の違いに至る例（第6章）、言語テキストの違いに至る例（第7章）、構文認定の違いに至る例（第8章）が論じられている。このうち、第8章では、コーパス中の1文字に対する釈読の結果から、未完了相の構文に対する新たな見解を得るに至っている。

第Ⅲ部の目的は文字素から言語ユニットを抽出し、言語テキストを作成することで、7つの章（第9章～第15章）によって構成される。第9章では本論文で使用する子音転写記号を設定し、第10章では文字素の種類ごとに機能とその子音転写を明示している。その上で、第11章において本コーパスの言語テキストを提示している。ここではコーパス全体を文に分け、文ごとに子音転写と翻訳を提示している。文を構成する言語ユニットの1つ1つに対しては、文字表記、表記タイプ、子音転写、訳、語釈を付している。

第12章～第15章は表記テキストとそれを構成する言語ユニットに関する各論である。第12章では、第11章で述べた表記タイプのうち非還元的表記について記述を行っている。発音補助が多用される神官文字や聖刻文字の表記では、非還元的表記の規則を知らなければ文字列を子音転写することができない。従来のエジプト学には非還元的表記を体系的に分析した研究が見られなかったが、本論文ではコーパス中に現れる非還元的表記を21種類の表記要素の型として体系的に整理している。表記要素とは、それ以上に細分すると音列との対応がくずれる最小の文字列を指す概念である。

第13章では限定符を表記要素として捉え、その分類と記述を行っている。エジプト学には、全ての限定符をある一定の基準で分類した研究が存在しない。そこで、本論文では限定符全体をD1（語義に関する限定符）、D2（性に関する限定符）、D3（表語文字に関する限定符）、D4（数に関する限定符）という4つの範疇に分類し、D1～D4の配列が「語幹 + D1 + D2 + D3 + D4」となることを突き止めている。D1とD2は語の派生に関わり、またD4は語の屈折に関わる限定符であるため、本コーパスの限定符は「語幹 + 派生に関わる限定符 + 屈折に関わる限定符」という配列をとっていることになる。これは派生接辞が語幹の近くに置かれ、屈折接辞は語幹から遠い位置に置かれる傾向があるという形態論的類型論の知見に符合する配列である。

第14章では表記要素としての数詞の記述を行い、第15章では写像性や倒置などの周辺的な表記について記述を行っている。

巻末には添付資料として「エルミタージュ・パピルス No.1115」の全体写真（添付資料1）、神官文字字形一覧（添付資料2）が付されている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、ロシアのエルミタージュ美術館に秘蔵される「エルミタージュ・パピルス No.1115」という貴重な一次資料を古書体学および文字素論という見地から精査することで、従来のエジプト学において広く行われてきた擬似一次資料に立脚する文献研究のあり方を批判して、中エジプト語神官文字資料の文献言語学

的研究の方法を例示した独創的研究である。さらに、方法論的な貢献に留まらず、「エルミタージュ・パピルス No.1115」という文献の研究という観点から見ても、古書体学的・文字素論的側面はもちろん、書誌学的側面、文法的側面、テキストの文献学的理解の側面において複数の斬新な結論が導かれており、学位請求論文として十分な学術的価値が認められる。特に次の2点が注目に値する。

本コーパスに対する最初の翻字は1906年に提示されたものであり、それ以降、15種類ほどの翻字が提示されている。しかしながら、それらの翻字は神官文字を聖刻文字に改めたものであり、そこからは異体字などの情報を得ることができない。それに対して本論文では、本コーパスに現れるすべての文字を文字コードで示している。これは世界初の試みである。今後、本論文の古書体学的データを電子媒体で公開する際に、文字コードの使用は検索機能の面で強みを発揮するものと思われる。

添付資料を含め、本論文で使用した「エルミタージュ・パピルス No.1115」のカラー写真はすべて筆者が撮影したものである。本パピルスは収蔵庫に保管されていて、一般に公開されていない。1913年にモノクロ写真を含む翻字が刊行されているが、カラー写真は未だ公表されていない。したがって添付資料1は単なる付録ではなく本論文の議論を支える貴重な資料だと言える。また字形や言語ユニットの情報を文字素ごとに列挙した添付資料2も、それ自体として独立した資料的価値を有する重要な研究成果である。

ただし、本論文に問題点がないわけではない。まず、上で述べたように言語構造の記述（第3段階）は本論文の範囲外となっている。しかし、第11章において本コーパスの言語テキストを提示する作業は古書体学的分析と文字素論的分析から機械的に成し遂げうるものではなく、体系的な言語構造の分析を踏まえて初めて可能となる。文ごとに子音転写と翻訳が提示され、文を構成する言語ユニットの1つ1つに対して訳と語釈が付されているが、その背後にいかなる言語構造が想定されているかが明示されていないため、やや一方的な言語テキストの提示に終わっている点が惜しまれる。また、通常古書体学研究は複数の文書に現れる文字の形状を時代差・地域差等を考慮しながら総合的に分析する。それに対し、本研究は基本的に単一の文書に現れる文字を包括的に記述するスタイルをとっている。この点では、本論文はいわゆる古書体学研究として不十分な面もある。これを出発点として、今後、他の多くの文書に対して同様の記述を積み重ねることにより、本論文の資料的価値をいっそう高めていく姿勢が求められる。

しかし、上記の問題点はいずれも筆者自身によって今後の課題として自覚的に受け止められており、本論文の学術的価値を損なうものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。